

里づくりを支えるもの

筆者が所属する角川里の自然環境学校では、今夏も様々な活動が展開している。中心的な活動は子ども達に里の自然や文化を伝えるものだ。例えば、里山の知恵や技術を伝えるために散策道を作って保全活動をしたり、炭焼き窯を復活させたりしている。また、農薬や化学肥料を一切使わない田んぼの学校や畑の学校を開講し、農業と結びついて棲息する生き物を観察するビオトープ整備をしている。

先日、子ども達と一緒に伝承野菜「角川カブ」を育てるために焼畑と種まきをし、整備したブナ林での散策会を行った。また、めだか池を整備するために暑い中、お父さん方と一日汗を流して木道整備を行った。食関係では、年間を通じた季節ごとの郷土食講習会を開き、地域の風土に密着した健康的な食のあり方を学んでいる。先日も伝統のしそ巻き作りの講習会をした。秋以降にはものづくり塾を開いてわら細工やつる細工工芸を学び、民話塾で地域に伝わる話から里の心を伝えようとしている。

これら多彩な活動は、もちろん里の住民による手作りの地道な活動の中で行われているのだが、それだけではない。多くの関係機関や外部の応援団によっても支えられている。そのひとつは、地域外から参加してくれる「ヨソモン」だ。「ヨソモン」は里作りに新たな「風」をもたらし、活動に新たな活力を与えてくれる。地元の「土」の人と外部の「風」の人が協働で里作りが行われる。

しかし、これだけではない。角川の里づくりを支えるものには、行政の中でも村の教育委員会の大きなサポートがあることも事実だ。村教委の長年のサポートはこれまでの地域教育活動を大きく支えてきた。その理念は、地域ぐるみで住民・学校・行政が連携して地域のよさを伝えながら子ども達を育てる、というものだ。地域教育活動を展開していく上で、学校教育との連携・調整は不可欠だが、村教委はこの難しい仕事に果敢に挑んでいる。学校教育課と社会教育課を融合した「共育課」(共に育つ教育を進めるという意味でこのような字を使っている)を設置し、地域・学校間の連携を図ろうとしている。学校指導主事と社会教育主事を融合した「学社融合主事」を配置しているのも特徴的だ。このようなサポート体制によって、筆者が所属する自然学校も学校間の連携を比較的円滑に行うことができたし、また、乏しい予算の中、物心両面から支援を頂いている。何より、土日もなく地域学習活動に参画して下さる村教委の姿勢は住民にとって大きな支えとなった。

このような里作りの動きの結果、最新の状況では、子ども達に意識の変化が起こっている。できれば村に残って暮らしていきたいというのだ。ここに角川地区、戸沢村は里作りの新しい局面を迎えた。子ども達が今後も村に残って暮らしていくためには、子ども達が地域に残れるような産業を育成していかなければならない。そして、その産業というのは、これまで地域のよさを伝える取り組みの中で、子ども達が好きになってくれた里の自然や文化、暮らし方に結びついたものでなくてはならないのだ。

今、村教委と角川里の自然環境学校ではこの新しい局面に対応すべく村産業振興課と連

携してプロジェクトを進めようとしている。具体的には、体験農業を基盤とした環境保全型の農産物作り、食育活動やものづくり塾の活動を基盤とした産品開発、里山や川や農地、ビオトープをフィールドとした交流人口の拡大などが考えられている。これらは、単純な商業主義的なものではなく、里を好きになってくれた子ども達にとって魅力ある手作りの温かいものでなくてはならない。5ヵ年にもわたる時間がかかる取り組みだが、教育長、産業振興課長はじめ、役場の面々も前向きだ。村長は「夢を語れる村にしていかなければならない」と言う。このように実は様々な思惑はあるとはいえ、村では県とも連携して新たなプロジェクトとサポート体制を構築しようとしている。先日も県の職員がボランティアで一日、住民と一緒に汗を流してビオトープ作りを手伝ってくれた。地域と行政との新しい協働のあり方が予感される光景だった。

これからの角川の里づくりがどのようにして展開していくかは未知数だ。村の行政もまた縦割りであり、志向性が必ずしも一致しているわけではない。行政と連携することによってかえって心配な点が多々出てくることも残念ながら確かなのである。しかし里を好きになってくれた子ども達のためにも地域住民の手作りの活動をより広くみんなで支えながら豊かなものにしていきたい、そんな願いを実現させるための懸命な努力の一端なのである。